“Nobody’s Normal”

—日本・韓国・アメリカのドラマにみる障害表象の現在地—

法学部政治学科

人文科学研究会卒業論文

2025 年 2 月

長生愛梨

はじめに

近年、BLM[1]やプライド・パレード[2]に代表されるように、歴史的に差別を受けてきたマイノリティグループが、自らの権利を主張し社会的平等を目指す社会運動が盛んに行われてきた。障害者[3]もまた、社会的平等を求めて声をあげてきたマイノリティグループのひとつである。日本では第二次世界大戦後から本格的に障害者施策が行われるようになり、以降、障害者諸団体の活動に呼応して、障害者に関する法律の制定・改正が行われてきた[4]。なかでも 1970 年に成立した「心身障害者対策基本法」は、障害者の自立・社会参加の支援等を推進することを目的とし、その基本原則を定め、国及び地方公共団体の責務を明ら

---

[1] BLM とは Black Lives Matter（ブラック・ライブズ・マター）の略称で、アフリカ系アメリカ人のコミュニティに端を発した、黒人に対する暴力や構造的な人種差別の撤廃を訴える運動の総称。2020 年 5 月に米ミネソタ州ミネアポリスで、アフリカ系アメリカ人のジョージ・フロイドさんが白人の警察官に首を圧迫されて死亡した「ジョージ・フロイド事件」を受け、全米に広がっていった。

[2]プライド・パレードとは、LGBTQ+（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、クィア・クエスチョニング）に対する差別や偏見に反対し、セクシュアリティやジェンダーの多様性を祝うパレード及び関連するイベントの総称である。1970 年にアメリカ・ニューヨークで始まったのをきっかけに、世界各国の様々な都市で開催されている。

[3] 本研究では、「障害」という表記を用いる。後述するように、障害の社会モデルの立場では、障害とは障害者に付随した特徴（インペアメント）を指すのではなく、障害者をとりまく社会的な障壁として捉えられるとされており、「障害」という表記はこの立場に基づくものである。

[4] 佐藤安. 「日本における戦後障害者運動の軌跡と課題について」 『社会論集』, no. 21, 2008, pp. 1–17, https://kguopac.kanto-gakuin.ac.jp/webopac/bdyview.do?bodyid=NI30000769&elmid=Body&fname=001.pdf&loginflg=on&block_id=_296&once=true. J-STAGE. (2024 年 1 月 25 日閲覧)。

かにした点で画期的だった。1993 年の改正によって「障害者基本法」と改められ、以後改正を重ねながら、障害者の社会包摂に関する基本方針として現在でも重要な法律として位置づけられている。また、2006 年に国連総会において採択された「障害者の権利に関する条約（Convention on the Rights of Persons with Disabilities）」は国際人権法に基づいて創られた人権条約で、現在 188 ヵ国が締約している[5]。

このような社会的国内外の法整備な流れと並行して、映画やドラマ、演劇などの物語コンテンツにおける障害者の表象も変化してきた。長谷川(2007)は『障害者白書　平成 7 年版』を参考に、社会の障害者観を①偏見と差別の障害者観、②憐み、同情の障害者観、③「共生」の障害者観、と障害者観を 3 つに分類しまとめ、社会の障害者観は①から③へ、障害者の立場に近づく方向に変化してきたと述べる。映画やドラマ、演劇が同時代の社会のあり様を反映するものであると考えるならば、物語における障害者表象も、これに伴って変化してきたと考えられる。

本論文では、映像表現における理想的な障害表象を考えることを目的として、日本・韓国・アメリカの三か国で障害をテーマに扱ったドラマを一作品ず

[5] Treaty collection, United Nations. *Status of Treaties*. United Nations, 4 Jan. 2025, https://treaties.un.org/Pages/ViewDetails.aspx?src=TREATY&mtdsg_no=IV-15&chapter=4&clang=_en,（参照：2025/1/4）.

つ取り上げ、現代ドラマにおける障害表象の現在地を探る。第一章では「障害の医学モデル/社会モデル」という概念を紹介し、3 つのドラマにおける障害表象が全て社会モデルに当てはまることを示す。第二章では、社会モデルという枠組みだけでは捉えきれない、各ドラマにおける障害表象の特徴やそれが視聴者に与える影響を、より詳細な視点で分析する。第三章では、各ドラマを「障害者と雇用」という観点から分析し、各国の障害者雇用制度の特徴とその背景を浮き彫りにすることで、障害者雇用のあるべき姿を探る。

日本のドラマからは『初恋、ざらり』[6]を、韓国からは『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』[7]を、アメリカからは『ユニーク・ライフ』[8]を取り上げる。ドラマを選ぶ際には、2010 年代後半以降に制作された最新のドラマであること、各国の制作陣によるオリジナルストーリーのドラマであることを条件とした。また、障害の違いそのものがもたらす障害表象の違いという観点は本論文の目的からは逸脱するため、なるべく近い条件下での障害表象の比較を可能にするべく、

---

[6] 『初恋、ざらり』は 2023 年 7 月期にテレビ東京で放送されたドラマである。ざくざくろによる原作漫画をもとにドラマ化された。各話 30 分、全 12 話で構成されている。

[7] 『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』は 2022 年に大韓民国で放送されたドラマシリーズである。各話 70 分、全 16 話で構成される本ドラマは、ケーブルテレビにあたる ENA チャンネルで放送され、Netflix でも配信されている。

[8] 『ユニーク・ライフ(原題：*Atypical*)』はアメリカ合衆国で制作された Netflix オリジナルドラマシリーズである。2017 年に 8 つのエピソードで構成されるシーズン 1 が公開され、続いてシーズン 2(10 エピソード)が 2018 年に、シーズン 3(10 エピソード)が 2019 年に公開された。2021 年に最終シーズンであるシーズン 4（10 エピソード）が公開され、物語が完結した。

本論文では、発達障害の一つである自閉症スペクトラム症を主題に扱うドラマを選んだ。

図２ 『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』キービジュアル
出典：“드라마 이상한 변호사 우영우.” *ENA*,
https://ena.skylifetv.co.kr/bbs/board.php?bo_table=drama&wr_id=25&page=4.

図 3 『ユニーク・ライフ(原題：*Atypical*)』キービジュアル
出典：“IMDb.” *Atypical*, https://www.imdb.com/title/tt6315640/.

この 3 カ国を選んだ理由は以下の通りだ。アメリカは、ポピュラーカルチャーの発信地としてトップランナーに君臨し続けている。また、多様な文化を持つアメリカではマイノリティグループの運動は盛んに行われており、マイノリティをどう表象するかという観点においても他国に先んじて議論が行われている[9]。韓国については、近年、ドラマ産業での世界市場への進出に成功して影響力を高めている。2020 年に韓国国内で放送され、海外でも同時配信された『愛の

[9] 塙(2024)は、「医学モデル的な障害観」が支配的な時代において、いち早く医学モデルへのアンチテーゼを示した作品として、1975 年に製作された『カッコーの巣の上で』と、1989 年に製作された『ドリーム・チーム』を挙げている。いずれもアメリカで制作された映画であることから、アメリカでは障害観の変遷に伴い障害表象の改良がいち早く実践されてきたことがうかがえる。

不時着』は、アジア圏を中心に Netflix のランキング上位を独占したほか、アメリカの『PC マガジン』の集計で世界 OTT(オーバー・ザ・トップ・メディアサービスの略。インターネット経由のストリーミングサービスのこと)で最も多く見られたコンテンツランキングで 4 位を獲得、バラエティ誌による「Netflix で最高の国際番組」にも選出されている[10]。このように、アメリカと韓国は文化的にも政治的にも日本に対して大きな影響を持っているばかりでなく、異なる背景・方法・規模でドラマを一大産業として築き上げた。この三か国を比較することで、ドラマという媒体における障害表象をより多角的に分析してグローバルな障害表象の現在地を論じ、障害表象が国境や文化の違いを超えてどうあるべきかを考えることが可能になるだろう。本論文で取り上げたドラマはあくまでもその国で制作された数多くのドラマのうちの一つであり、その国の障害表象のあり方を網羅的に整理、分析したものではない。これら 3 カ国におけるより包括的な研究、そしてこれら以外の国や地域で制作されたドラマも含めた研究は今後の課題ではあるが本論の範疇を超えていることを付言しておこう。

[10] "The Best International Shows on Netflix". *Oricon*. (2020 年 4 月 29 日) 2024 年 2 月 2 日閲覧。

目次

第 1 章：『普通』という曖昧な価値観：「障害の医学モデル」と「障害の社会モデル」..... 9

第 2 章：社会モデルでは捉えきれない障害表象のディテール 15

1. 私有化と同一視のパラドックスを超えて：『初恋、ざらり』における共感可能な障害表象の問題 15

2. 『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』による障害の矮小化リスク 20

3. ネタとしての障害者表象の倫理性：視聴者にとってサムは「笑いの対象」なのか 28

4. ブラッシュアップされる障害表象：『ユニーク・ライフ』のシーズン 1 から 4 にかけての展開 35

第 3 章：ドラマにみる各国の「障害者と雇用」のあり方 38

1. 夜職と昼職、福祉的就労と一般就労とで揺れ動く障害者のジレンマ 38

2. 高学歴発達障害者が直面する就労上の課題 46

3. 『ユニーク・ライフ』にみられる統合雇用モデルの障害者雇用 49

おわりに 54

参考文献 59

第 1 章：『普通』という曖昧な価値観：「障害の医学モデル」と「障害の社会モデル」

3 つのドラマを読み解く前に、障害を捉える際の学術的な理論として「障害の医学モデル」と「障害の社会モデル」についてまとめることから始めたい。医学モデルとは、個人の「身体的・精神的な医学的特徴(インペアメント)」を「障害」と捉える考え方であり、それに対して社会モデルとは、「障害」とは「個人の身体的・精神的な医学的特徴(インペアメント)に対する社会的障壁であり、それによって個人が被る不利益」であるとされる(西倉、2011、p.31)。塙(2015)は、1980 年代以前の社会では障害は医学モデルによって捉えていたが、1980 年代初頭から社会モデルによる障害認識に移行していった背景を踏まえ、映画における障害表象もこの社会認識の変化によってある程度の関連性を持って変化したと述べている。

例えば、日本で制作された『初恋、ざらり』を挙げてみよう。これは、IQ68 の軽度知的障害がある上戸有紗と職場の上司である岡村龍二との恋愛模様を主題した各話 30 分で全 12 話の連続ドラマである。有紗は物語序盤ではシングルマザーである母親と同居しているが、自身の決断で職場を選んで働き収入を得ており、独立した主体である。また、有紗が病院やカウンセリングにかかるシー

ンはなく、物事を覚えることや言葉の文脈を読むのが苦手であるという軽度知的障害の特性は度々彼女を悩ませるものの、ドラマ全体を通して、それらの特性は「治すべきもの」ではなく、「付き合っていかなければならないもの」として描かれる。さらに、ドラマ全話を通じた有紗の悩みの根幹が、みんなが言う「普通」とされることが出来ないこと、そしてそれによって自己肯定感が下がり、自分自身に価値を見出せなくなってしまうことであることを踏まえると、有紗の葛藤は『普通』という曖昧な価値観によって人を評価し、そこからあぶれた人を排除するような社会のあり方に起因すると捉えられる。こういった事実から、『初恋、ざらり』に表象される障害は社会モデル的であると言えよう。

日本と同様に韓国でも社会モデルを体現したドラマが制作されている。『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』は、2022 年に放送されたドラマシリーズで、自閉スペクトラム症を持つソウル大学のロースクールを首席で卒業した新人弁護士が様々な事件を解決し、成長していく様を描いた物語である。この韓流ドラマにおいて、主人公のウ・ヨンウはシングルファーザーである父親との二人暮らしで生活面は父親に支えられているが、弁護士としての知識や能力は申し分ない。ときに自閉症スペクトラム症であることが弁護士としての障壁となったり、反対に天才的な記憶力・ひらめきによって裁判を有利に進めたりするが、

ドラマ全話を通じては、自閉症スペクトラム症の人間としての成長ではなく、一人の弁護士として成長していく様が描かれる。

さらに、第 3 話と第 10 話では、裁判の被疑者/被害者として、ヨンウ以外にそれぞれ一名の知的障害者が登場する。第 3 話では、知的障害者に対して社会が抱く偏見の目が描かれ、第 10 話では障害者の自己決定の問題が、一つの答えを導き出すのではなく、視聴者に答えを委ねる形で描かれる。いずれも、障害者の社会の中での生きづらさや、社会との軋轢が主たるテーマとなっている。これらの特徴からやはり『ウ・ウヨンウ弁護士は天才的』における障害表象も、社会モデル的を反映していることがわかる。

アメリカで制作された NETFLIX オリジナルドラマ『ユニーク・ライフ』も同様に社会モデルを前提とした障害表象がなされている。物語は、自閉症スペクトラム症の 18 歳の主人公・サムの学校生活や家族・カウンセラーとの日常を追っている。このドラマでは、恋愛をしてみたい、と恋人探しを始めるサムを中心に据えながら、自閉症スペクトラム症の息子を持つ父と母それぞれの悩みとすれ違い、自閉症スペクトラム症の兄を持つ妹の葛藤が群像劇のような形式で描かれる。サムは定期的にカウンセリングを受けているが、それは治療というよりも、自身の特性と付き合いながら社会において生きていく術を共に考えていくための他者との対話という側面が大きい。また、サムは言外の意味や

文脈を読み取るのが苦手であるという自閉症スペクトラム症の特性を持つがゆえに、無意識に相手を傷つけたり侮辱してしまったりする発言をし、度々トラブルを起こしてしまう。サムの家族や同僚はそんなサムの特性を理解し、摩擦を避けることが出来るが、自閉症スペクトラム症を知らない他人とは、軋轢が生じてしまう。サムに好意を寄せるペイジは、そんなサムの特性を個性だと理解し、そのうえで恋人としてのコミュニケーションを模索していく。このように、自閉症スペクトラム症であるサムと周りの人間(家族・恋人・同僚・クラスメイトなど)の摩擦や軋轢を、生々しくかつ軽快に描いた本ドラマもまた、社会モデル的な障害表象であると言えよう。

これら3つのドラマは、作品のジャンルという点では性質を異にする。『初恋、ざらり』が有紗と岡村の恋愛模様にフォーカスした恋愛ドラマであるのに対して、『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』はヨンウの弁護士としての奮闘ぶりが主題として描かれる職業ドラマであり、『ユニーク・ライフ』は数年単位の長いスパンにおける家族の関わりにフォーカスした家族ドラマであると言える。しかし、これら 3 つのドラマ全てに共通して、仕事と恋愛という普遍的な事象が障害という要素と絡めて扱われている点は極めて興味深く、いずれも障害の社会モデルを前提としたドラマであることとの関連性が窺える。

塙(2015)は、社会における障害認識が医学モデルから社会モデルに移行して

いった 1980 年代初頭以降もなお、映画作品では医学モデル的な障害表象が優勢であり、2000 年代においてもなお映画業界全体が社会モデル的な障害表象に移行したとは言えないと結論付けている。その要因として、障害モデルに関する議論と障害表象とには乖離があること、さらには一般社会の人々が抱く障害認識が必ずしも先端的な障害モデルの議論に追いついているわけではないことが挙げられる[11]。それにも関わらず 2010 年代後半～2020 年代にかけて制作されたドラマ 3 作品がいずれも社会モデルの障害者観を反映しているという背景には、二つの文脈における影響が考えられる。一つには 1980 年代から議論され始めた「社会モデルの障害者観」が 30 年あまりの期間を経て一般化してきたことであり、もう一つには、人種やジェンダーなど様々なマイノリティ表象に関する議論が進み、映像業界において多様性への取り組みが急速に進んだことである。特に後者に関しては、2016 年に「#OscarsSoWhite（アカデミー賞はあまりに白い）」というハッシュタグ運動が発生したことを契機に、ハリウッド全体が多様性を意識する方向へと舵を切ったことが大きな転換点となった。

この二つの流れを受けて制作された 3 つのドラマ作品が、Netflix のようなグローバルな配信プラットフォームや視聴者数の多い地上波テレビ局で配信・放

[11] 2016 年のアカデミー賞にて、2015 年から 2 年連続で演技部門にノミネートされた俳優がすべて白人だったことに批判が殺到。さらに 2016 年に「アカデミー会員６２６１人中９２％が白人で、その７５％が男性」という構成が明らかになったことで、ネット上で「#OscarsSoWhite（アカデミー賞はあまりに白い）」といったハッシュタグが拡散された。

送されたことを踏まえると、現代のドラマにおける障害表象の主流は、ようやく社会モデルへと移行しつつあると言える。

しかしながら、たとえ社会モデルの障害者観を前提に作られたドラマであっても、障害表象のディティールを検証していくと、視聴者の障害者に対する偏った認識を助長しうるような表現が局所的に見られることがある。次章では、この社会モデルという枠組みでは捉えきれない障害表象の問題を扱っていく。

第 2 章：社会モデルでは捉えきれない障害表象のディテール

1. 私有化と同一視のパラドックスを超えて：『初恋、ざらり』における共感可能な障害表象の問題

第 1 章では、3 つのドラマを障害の医学モデルと社会モデルという観点から検証し、いずれも社会モデル的な障害表象がなされていることが分かった。しかしながら、社会モデルという枠組みだけでは、障害表象のリアリティや当事者性の有無、物語において障害という要素がどう機能しているかなど、障害表象の特徴をより深い次元で捉え、比較分析することは困難である。そのため、本章では 3 作品が社会モデル的な障害表象がなされているという前提を踏まえたうえで、各作品に特徴的な障害表象のあり方や共通項を取り上げ、それが視聴者の受容にどう影響するかを考察していく。

『初恋、ざらり』の主人公の有紗が IQ68 程度の軽度知的障害であることはすでに確認した通りだ。ここでさらに注目したいのは、周囲の人には障害があることはすぐには気付かれないにも関わらず、彼女には物事を覚えることや言葉の文脈を理解するのが苦手であるといった特性があることだ。この作品では、一見「普通」に見えるのに、世間一般が考える「普通のこと」が出来ないというジレンマに苦しむ有紗の様子が克明に描かれており、漫画原作からドラ

マ化されるにあたってもこの点は最重要視された。原作者ざくざくろは、「ドラマ化にあたってこの部分はブレないようにしてほしいという制作陣への要望はありましたか？」という質問に対して、「見た目で有紗に障害があるとはわからないようにしてほしいと頼んだ」と答え、見た目で障害があるとは分からない故の苦しみや葛藤を描くことが一番大事だと述べている[12]。

「普通」と「普通じゃない」の狭間で葛藤する有紗の姿が描かれる本作では、本作が想定する「普通」の人=健常者の目線からも、有紗の葛藤に共感できるような工夫が施されている。例えば本作では、有紗の顔のクローズアップを映しながら心の声がモノローグとして挿入されるという表現技法が多用される。第一話の運送会社での勤務初日、有紗が「AM と PM って何ですか」と岡村に聞き「えっ？」と反応された際には、表情が固まる有紗の映像と共に「これ、みんな知ってることなんだ…」という台詞がモノローグとして挿入される。また、第二話では、前日に岡村とキスをしたものの、岡村が自分のことをどう思っているのかが分からず困惑する有紗の心情が、「目、逸らされたよね。なんで逸らすの」「嫌われた…？」「分かんない…避けられてる…？怒ってる…？なんで…？キスしたの、忘れちゃったのかな。もしかしたら、私のこ

[12] 「見た目で障害とわからない故の苦しさや感情を描きたかった 『初恋、ざらり』：漫画家ざくざくろインタビュー』 テレ東プラス, 2023 年、 https://www.tv-tokyo.co.jp/plus/drama/entry/202307/13654.html,(参照 2024-7-28).

と嫌いになった？」という一連のモノローグと、有紗の表情のクローズアップによって表現される。このような表現より視聴者は、自分の心情を整理し、言葉にして表出することが得意ではない有紗の複雑な内面を理解し、共感することが可能になる。また、有紗の細かな表情の変化から心情を読み取っていくことで、有紗と視聴者との心理的距離が接近するという効果もある。

さらに、有紗が脳内で処理しきれない出来事に直面したり、混乱に陥ったりした時、ブクブクと水の中に沈んでいくような効果音が頻繁に用いられる。これは、有紗の混乱を、何もできずに水の中に沈んでいく息苦しさに例えた表現として読み取ることができ、これによって視聴者は、有紗の内面的な焦りや混乱を感覚的に理解することが可能になる。

このような演出的工夫によって、有紗の葛藤は知的障害者に特有のものとして描かれるのではなく、一般化され、健常者を含む多くの視聴者が共感できるものとなる。鈴木桃花は本作について、「『“普通”になれない』という不安は、現代人が心のどこかに抱えている不安な気持ちとリンクする。また、そうした環境で生まれた劣等感から、他人に流されやすい性格の人も増えているという。だからこそ、有紗の気持ちに寄り添って視聴者は本作を観ることができるのではないだろうか。」と評している[13]。

---

[13] 鈴木桃花「『初恋、ざらり』キャラクターの心情に共感の声が続々　現代人との‘ざらり’とし

しかしながら、ドラマや映画などの作品において障害者が共感可能な存在として描かれるとき、障害の多様性や個別性は隠蔽され、多様であるはずの障害を単純化してしまう可能性がある。塙(2015)は、本来は「他者」であるはずの障害者が共感・同化可能な存在へと位置づけ直されていくことで、障害の多様性や個別性を隠ぺいし、障害を単純化することを「障害・障害者のステレオタイプ化」と名付けている[14]。

また、グッドマン(2017)は、優位集団(マジョリティ)の人々が劣位集団(マイノリティ)の人々の経験に共感させようとする行為の危険性を、二つに分類している。一つは「私有化のパラドックス(paradox of appropriation)」で、相手の経験の中に自分を置いてみるといった行為には、相手の状況における特殊性を排除し、お互いの経験を等しいものだと捉える傾向が見られることを指す。もう一つは「同一視のパラドックス(paradox of identification)」で、優位集団と劣位集団の経験の相違点やこうした経験が起きる大きな社会的・歴史的文脈を無視することで異なる経験の類似性を強調しすぎる点があることを指す。こうした共感力に潜む危険性を踏まえた上で、グッドマンは共感を促すときは類似

た共通点」*Real Sound*映画部、2023 年、https://realsound.jp/movie/2023/08/post-1411458.html, (参照 2024-7-28).

[14] 塙幸枝「『映画における障害表象―コミュニケーションの問題として描写される障害』 *Japanese Journal Communication Studies*, vol. 43, 2, 2015, pp. 109–124 頁. J-STAGE.

性を強調するあまり相違点が不明瞭にならないように注意し、権力や社会的立場の違いを認めなければならないと述べる[15]。

グッドマンの忠告に耳を貸す時、『初恋、ざらり』において知的障害のある有紗の心情を共感可能なものとして描くことは、視聴者を私有化のパラドックスや同一視のパラドックスに陥れ、究極的には「障害・障害者のステレオタイプ化」の強化に繋がっていると言えるだろうか。

たしかに本作では、物語のプロットや演出的工夫によって視聴者が有紗の内面に共感することが促されており、しかも共感性の高さという点において一定の評価を得たことも事実である。ただし、「見た目で障害と分からない故の苦しさや感情」というテーマのもとで、健常者と障害者との社会的立場の違いが生み出す「スティグマ」[16]の問題とそれによる有紗の苦悩も描かれていることにも注目したい。例えば第 3 話では、職場では障害のことを隠していた有紗だったが、療育手帳[17]を持っているところを同僚に目撃され、同僚と恋人に知的障害者であることが意図せず知れ渡ってしまうシーンがある。これによって同僚

---

[15] ダイアン・グッドマン『真のダイバーシティをめざして－特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育』田辺希久子訳、上智大学出版、2017 年、204-05 頁。

[16] 「スティグマ」とは、精神疾患など個人の持つ特徴に対して、周囲から否定的な意味づけをされ、不当な扱いことをうけること。現代では、精神疾患や HIV、LGBTQ のような社会的に立場の弱い人々に対する差別や偏見などを含むような言葉として用いられる。

[17] 療育手帳とは知的障害のある方が申請できる手帳のこと。これを取得することで、交通機関の割引や税金の控除など自治体によって定められたサービスを受けることができる。発達障害のある方は療育手帳ではなく、精神障害者保健福祉手帳が対象となる。有紗の場合、発達障害に知的障害が伴っているため、療育手帳を取得することが可能となる。

や恋人と有紗との関係性は変化し、その結果有紗は「障害がある」という事実により一層苦しめられる。有紗が職場の人に自身の障害を告白することを躊躇ったのも、障害があることが知れ渡ってしまった結果苦悩したのも、過去に「障害がある」と告白したことで不当な扱いを受けたり、ステレオタイプに基づく言動が行われたりと、あらゆる困難に直面してきたからだろう。そしてそれは、依然として障害者に対するスティグマを持つ人が多い現代日本社会において、「障害がある」と伝えることのハードルがいかに高いかを示唆している。つまり、障害者を取り巻く社会の有り様が共感の限界と共に描かれているという点を鑑みると、本作では必ずしも健常者と障害者との社会的立場の違いを曖昧にしているわけではなく、たとえ障害のない視聴者が有紗の心情に部分的に共感したとしても、同時に有紗が置かれた社会体立場を自分とは違うものとして認識し、理解し、考えることを可能にしているといえる。

2. 『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』による障害の矮小化リスク

『初恋、ざらり』と同じく障害の社会モデルを体現している『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』にも問題がないわけではない。同ドラマは「一話完結型の法廷エンタメドラマ」であるが、この形式は障害の矮小化リスクを内包しているか

らだ。ここで言う一話完結型とは、各話で一つ新たな事件が発生し[18]、ヨンウの所属するハンバダ法律事務所が被告もしくは原告側の弁護団として裁判を行い、判決が出るまでの一連を一話ないしは二話に収めて描く物語の構造のことを指す。この構造が内包する障害の矮小化リスクを考える上で、Michael David Moeder (1994)の分類を援用したい。Moeder は、連続ドラマにおける物語の構造について、「シリーズ(“series”)」と「シリアル(“serial”)」という二つの分類[19]を用いている。[20]

まず「シリーズ」とは、登場人物やシチュエーションがある程度固定的で変化しないような構造のドラマのことで、個々のエピソードで描かれる問題はそのエピソード内で解決するという一話完結型をとっている。そのため、物語を推進するのは外部キャラクターに委ねられ、彼らが持ち込んだ問題が解決されると通常、それ以降のエピソードに彼らが再び出演することはない。これに対してシリアルは、番組が進むにつれて登場人物や状況が成長あるいは変化し、個々のエピソードが一話で完結することなく、次回にストーリーが続いて行く

---

[18] 7 話『ソドク洞物語Ⅰ』と 8 話『ソドク洞物語Ⅱ』、13 話『済州島の青い夜Ⅰ』と 14 話『済州島の青い夜Ⅱ』では、それぞれ 2 つのエピソードで 1 つの事件が取り上げられる。

[19] Moeder が分析対象としたのはテレビのプライムタイム(看板番組が並ぶ時間帯のこと。アメリカでは月-土曜の 20:00 - 23:00 と日曜の 19:00 - 23:00 がこれに当たる)に放送されていたシチュエーション・コメディドラマであるが、シリーズとシリアルという二つの分類は本作を含む他ジャンルのテレビドラマにもまた有効であると判断し、ここで紹介する。

[20] Moeder, Michael. “A Comparative Analysis of Narrative Structure in the Prime-Time Television Situation Comedy”. PhD diss., University of Missouri-Columbia, 1994.

という特徴を持つ。つまり、シリーズは「一話完結型のドラマ」と、シリアルは「物語連続型のドラマ」言い換えることができる。

Moeder の定義に基づくと、『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』は、シリアルとシリーズのハイブリッド型のドラマということになる。ハンバダ法律事務所が各エピソードで新たに発生する事件を受け持ち、弁護するというシチュエーションはドラマ全体を通じて固定されており、登場人物もハンバダ法律事務所内のキャラクターを中心として固定されている。しかしながら、本作ではそれのみならず、全話を通じて描かれるストーリーライン— ヨンウの弁護士としての成長、ヨンウとジュノの恋愛、ヨンウと母親との関係性）— もある。これらのストーリーラインは、エピソードが進むにつれて登場人物の状況が成長や変化するため、この点において本作はシリアル的な側面も持つ。

シリーズとシリアルとのハイブリッド型で物語が展開される場合、各エピソードの起承転結は各話で新たに発生する事件に基づいて展開されるため、全話を通じて描かれるストーリーラインは必然的に副次的な扱いになる。しかしながら本作において、ヨンウの障害者としての苦悩や葛藤は、個々のエピソードで発生する事件や裁判においてよりも、弁護士としての成長やジュノとの恋愛など、全話を通じて描かれるストーリーラインにおいてより克明に描かれる。

つまり本作では、シリーズとシリアルのハイブリッド型であるという物語の構造上、障害という要素は背景化されてしまうのだ。

障害という要素が背景化されることは、障害表象の在り方として必ずしも不適切というわけではない。むしろ、障害のあるキャラクターとないキャラクターとを同等に扱って描くことは、障害表象の理想的な在り方の一つであるだろう。しかしながら、本作の物語構造におけるもう一つの特徴、「法廷エンタメ劇」という要素と組み合わさった際に、障害者が生きる現代社会をリアルに描くことが後回しにされ、障害という要素がドラマのエンターテインメント性を担保するために都合よく利用されてしまう可能性がある。ここで言う「法廷エンタメ」とは、相手側の弁護士との駆け引きを繰り広げたり、新たな事実に気づいて法廷での判決を覆したりなど、裁判にまつわる出来事によって物語を進展させることで視聴者に対して「引き」を作り、面白さを担保するような物語の在り方である。自閉症スペクトラム症のあるヨンウは並外れた記憶力を持っており、裁判で追い込まれた際に持ち前の記憶力を駆使したり、また、時に天才的な閃きをしたりすることによって苦境から脱する。これは、彼女の障害の特性が「法廷エンタメ劇」としての面白さを担保するために利用されているとも捉えられる。

反対に、「法廷エンタメ劇」の要素を中心に据えた本作では、そのエンターテインメント性を損なうようなリアルな描写はしばしば省かれる。例えば1話では、ヨンウが初めてハンバダ法律事務所に出勤し、彼女に自閉症スペクトラム症があることを知らなかったチョン弁護士が困惑するシーンや、被告人と担当者のヨンウが初めて顔を合わせた際に、コミュニケーションがおぼつかない様子の彼女を見て被告人が不服そうな表情を浮かべるシーンがある。本来これらのシーンは障害当事者にとっては、自身の性格や能力を深く知ってもらうのに先立って、第一印象によって否定的かつ時にステレオタイプなイメージを抱かれてしまうという、現代社会での生きづらさを描いた生々しいシーンであるはずだ。しかしながら、どちらのシーンでもBGMとして軽快な音楽を用いることによって、その場に流れる不穏な空気やヨンウが受ける精神的ダメージは矮小化されてしまう。

以上のことから、本作では、「一話完結型」の物語構造によって障害という要素が背景化された上で、さらに、「法廷エンタメ劇」という側面に重点が置かれることによって、障害者が現代社会を生きる上でのリアリティはしばしば軽んじられ、障害の特性がエンターテインメント性を担保する道具として都合よく利用（もしくは悪用）されてしまっていると捉えられる。

また、本作ではヨンウ以外にも障害のあるキャラクターが二人登場するが、主人公として全話を通して描かれるヨンウと、それぞれ一話のみにしか登場しない他のキャラクターとでは障害表象にもかなりの差がある。以下では、障害のある二人のキャラクターの障害表象と、それが孕む問題とを考察したい。

第 10 話では、障害者女性シン・ヘヨンと、彼女への準強制性交等の容疑で緊急逮捕された男ヤン・ジョンイルとの裁判が物語の中心となり、「障害者の恋愛及び自己決定権」というテーマを描き出す。第一審では、ヨンウ率いる被告人側の弁護団はメッセージアプリでのやり取りを証拠に、ヘヨンとジョンイルは恋人関係にあったと主張するが、ヘヨンの母親は「あの男は娘をもてあそんでいるだけだ」と主張する。続く第二審では、ヘヨンの診断を行った医師が「知的障害者は不純な動機を純粋な愛情と勘違いしやすく、関係が適切か不適切化を区別しにくい」ため、ジョンイルとの性行為にあたっては「ヘヨンに自己決定権があったとは断言できない」と主張し、被告人の弁護団は劣勢に追い込まれる。その後、ヨンウはヘヨンがジョンイルのことを愛していたという本音を聞き出したことで、第三審ではその旨を証言するよう伝える。しかし彼女の証言にも関わらず、ジョンイルには懲役二年の判決が下り、ヘヨンは法廷で泣き崩れてしまう。「障害者の恋愛及び自己決定権」というテーマは、ヨンウとジュノの恋愛のストーリーラインやヨンウと父親との関係性の描写などを通

じても映し出されるが、当エピソードで改めてフォーカスを当てて取り上げることによって、視聴者は複雑なこのテーマについて多角的な視点から考えることが可能になる。

しかしながら、当エピソードの障害表象には少なくとも二つの問題点がある。一つ目は、ヨンウがヘヨンに「障害者でも悪い男に恋する自由があります」と助言したことの是非についてである。第二審後にヘヨンと直接会ったヨンウは、ジョンイルを愛しているという本音を法廷で証言するよう頼むが、彼女は母親に怒られることを危惧して躊躇する。上記の助言は、証言を躊躇うヘヨンに対してヨンウがかけた言葉であり、障害者にも自己決定権があるのだというメッセージを視聴者に伝える上では、重要な台詞である。その一方で、ヨンウは高機能発達障害であるのに対し、ヘヨンは小学 6 年生程度の IQ の知的障害であり、学力レベルや判断力には大きな差があることは強調しても強調しきれない。このような障害の種類や等級の差を顧みずに、「障害者」という一括りの立場から助言を行う姿を好意的に描くことで、視聴者はその危険性と無責任さを見過ごしてしまうからだ。

二つ目は、このエピソードにおいて「障害者にも恋愛をする権利がある」というメッセージを伝えることが、グルーミングの美化・正当化に繋がってしま

うという点である。グルーミング(grooming)[21]とは、性交や猥褻行為などの性的虐待をすることを目的に、未成年の子どもと親しくなり、信頼など感情的なつながりを築き、子どもの性的虐待への抵抗・妨害を低下させる行為である[22]。ヘヨンとジョンイルが恋人関係にあったことは当人たちも認めているが、ジョンイルが彼女の名義でクレジットカードを作ってデート代を払わせていたことから、彼は金銭面の授受や性行為に及ぶことを目的としてヘヨンに近づいたのではないかと原告側の弁護人は主張する。ヘヨンは 27 歳の成人女性ではあるが、小学 6 年生程度の IQ の知的障害と診断されていることを鑑みて、もしこの主張が事実であるならば、ジョンイルがヘヨンに対して行っていた行為はグルーミングに準ずるものとみなすことができる。ドラマ内ではジョンイルの真意は明らかにはされないため、彼の行った行為がグルーミングと一概に断定することは出来ない。しかしながら、当エピソードにおいては障害者が恋愛する権利を強く主張するあまり、その裏返しで、グルーミングが美化・正当化されて描かれてしまっていることは否めず、視聴者の認識に影響を与えることが危惧される。

---

[21] グルーミング(grooming)とはもともと「(動物の) 毛づくろい」を意味する。

[22] Michelle McManus, “Grooming: An Expert Explains What It Is and How to Identify It.” *The Conversation*, 16 May 2022, https://theconversation.com/grooming-an-expert-explains-what-it-is-and-how-to-identify-it-181573, (参照 2024-7-30).

もしジョンイルの真意がグルーミングによる搾取であったと明確に描かれていた場合、障害者にとってグルーミングがいかに危険であるかを提示することはできるものの、ヘヨンが一方的に騙されていたことになるため、障害者の自己決定権というテーマを描く上では不利に働くと想定できる。反対に、もしジョンイルが純粋な愛情で交際しつつも、ヘヨンが障害者であるという事実を理由に性的・経済的に搾取するようになったという経緯が描かれていた場合、純粋な愛情が搾取に転じてしまうことの悲劇性が強調され、障害者と非障害者が対等な立場で交際することの難しさに焦点が当たることが想定される。いずれ設定を用いる場合においても、「障害者には自己決定権がある」がそれと同時に「グルーミングの対象として搾取される危険性がある」ということを、両側面からバランスよく描くことが重要である。

3. ネタとしての障害者表象の倫理性：視聴者にとってサムは「笑いの対象」なのか

『ユニーク・ライフ』も他 2 つの作品と同様、ドラマ全体としては社会モデルを体現しつつも、障害表象のディテールには改善すべき点が散見される。シーズン 1 が公開された 2017 年 8 月に *Teen Vogue*[23]にて、自身が自閉症スペク

[23] *Teen Vogue* はアメリカの、ファッションや芸能に関する若者向けのオンラインマガジン。

トラム症であるというアメリカ人俳優の Mickey Rowe による批評文が寄稿され、当ドラマにおける障害表象に批判的な意見が投げかけられた。“Netflix's ‘Atypical’ Was a Major Disappointment for Autism Representation”と題された記事における彼の主張を簡単にまとめると、『ユニークライフ』に描かれるサムは、彼の行動の突飛さや奇妙さを強調することによって、視聴者が彼を笑いものにするように仕向けられており、それによって視聴者の自閉症に対する偏見を助長しているというのだ。換言するならば、本ドラマでは障害の特性が「笑い」を引き起こす装置として働くことで、障害をネタにしたコメディとしての機能を担っているというのである。

例えば、第一話でサムがマッチングアプリで出会った女性との初めてのデートの最中、レストランで食事をするシーンを Rowe は取り上げている。感覚過敏で騒々しい場所が苦手なサムはヘッドホンを付けて食事を共にするが、そのことを相手の女性は訝しむ。(この女性は、サムが自閉症であることや感覚過敏であることは知らないのだ。)このレストランのシーンの直前に、サムがカウンセラーに向かって「騒々しくて慣れない場所は苦手だ。何も考えられなくなって固まる。でも大丈夫、秘策がある。」と語る短い発言が挟まれていることを考えると、ヘッドホンをすることを「秘策」として実践するサムと、その「秘策」を良いものだとは思わず居心地の悪さを感じる女性とのギャップが、笑い

を引き起こす装置、いわゆる「ネタ」になっていると捉えられる。だがこのシーンで特筆すべきはむしろ、「秘策」が通用せず雰囲気の悪さに焦ったサムが、なんとか会話を続けようとして、その場にそぐわない発言をし、相手を唖然とさせてしまう点である。事前にインターネットの動画で女性の口説き方を調べた際に学んだ「君の目はデメキンみたい」という言い回しや、デート前に妹のケイシーと会話していた際にケイシーに絶対に言うなと釘を刺された「猫が嫌いだ。シンバ(女性の飼い猫)を捨てて」という発言は、その相手の感情を顧みない突飛さが際立っている。

しかしながら、サムにとって居心地の悪い騒々しいレストランでのデートという状況下で、会話が上手くいかずに追い詰められてこれらの発言をしてしまったということはサムの様子からも一目瞭然であり、かつ、このシーンにおいてはサムの言動の突飛さばかりでなく、サムの特性を知らない相手女性がサムに対して向ける訝しげな表情や冷ややかな目線、周囲の目を気にする仕草が印象的に映し出される。これらを踏まえると、「普通」から逸脱する人間に対しては容赦なく冷たい視線を向ける社会の中で、空気が読むことが苦手で「普通」に振る舞うことのできないサムがいかなる苦悩を抱いているかが端的に表されたシーンであると理解できる。したがって、Rowe が主張するようにサムのヘッドホン着用やその他の言動は単に笑いを引き起こすためだけの装置であ

る、と短絡的に結び付けてしまうべきではないことがわかる。1 話終盤では、レストランでのデートや別のデートでの失敗を経たサムが、妹のケイシーと妹の恋人となるエヴァンを前に、“Sometimes I wish I was normal”と弱々しく心情を吐露する。これに対してエヴァンが返す“Well, dude, nobody’s normal.”という言葉は、このドラマ全体を貫く価値観を表しているとも言える。

別の似たようなシーンを取り上げてみよう。この女性とのデートに失敗した後にサムは、アルバイト先で女性をデートに誘うことに成功するが、その女性からセックスの誘いを受けて身体を触られた際に、ソフトなタッチをされるのが苦手だと言えず、反射的に相手を突き飛ばしてしまう。その女性は憤慨し「もしかして変な人？頭がおかしいの？」とサムに言い放ち、落ち込んだサムは、妹と彼女のボーイフレンドの前で、「僕も普通ならよかった」と漏らす。このシーンでは BGM を含めた演出面でも、サムの落ち込み具合が強調され、センチメンタルに描かれている。一話全体の筋をみると、恋愛が出来ないサムを笑いものにして描いているというよりは、恋愛をしたいけれど、文脈や相手の感情を読むのが苦手であることや感覚過敏であることで誤解を招いてしまったり意図せず相手を傷つけてしまったりするサムの苦悩に焦点が描かれていることが分かる。

他にも Rowe は、「サムの自閉症は、周囲の人々を信じられないほど不快にさせるという形で描かれる」と述べ、その例として第一話で“twat”(「間抜け」と「女性の陰部」という二つの意味がある。なお、ドラマ字幕の翻訳としては「ヤリマン」)という単語を繰り返すシーンをあげている。妹が母との会話で発した“twat”という言葉がサムの頭の中に残り、頭の中で“twat”という言葉を繰り返しているうちに、家に訪ねて来たケイシーの友だちに突発的に“twat!”と叫んでしまう。確かに、サムが初対面の人に対して“twat!”と叫んでしまう様子は、驚きや笑いを引き起こす。

Rowe が指摘した通り、このドラマは自閉症を笑いのネタにしてしまっている可能性はある。ただ、この場面でも「たまに言葉やフレーズが輪になって何度も何度も頭の中で鳴り響く」というサムのモノローグが直前に入ることによって、サムの頭の中が主観的な視点で提示され、彼が突飛な発言をしてしまった所以が視聴者にも理解可能になっている。さらに、このモノローグは後に、前述したデートのシーンにおける突飛な発言とも関連づけて理解される。したがって、サムの特性は時として（自閉症患者のみならず健常者も含んだ）視聴者による笑いのネタとして機能することも事実であるが、単に笑いのためだけの要素ではなく、サムの言動の由来や、サムが恋愛をするにあたっての苦悩

を、多くの視聴者に理解可能な形で示すという役割も果たしていると捉えられる。

『ユニークライフ』は、主人公のサムのみならず、サムの家族(父、母、妹)それぞれにスポットライトが当たる群像劇であり、この点において他の二つのドラマとは異なる。『初恋、ざらり』では、有紗の心情を描くことに重点が置かれ、物語の展開は有紗の心情を追う形で展開していく。『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』ではストーリーは客観的な目線で描かれるものの、ヨンウの行動を中心に物語は展開していく。したがって、『初恋、ざらり』と『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』では必然的に、主人公である有紗やヨンウに共感したり、感情移入したりして見る可能性が高くなる。一方、『ユニークライフ』では、上で指摘した通り、家族 4 人の軸が並行して描かれ、それぞれの苦悩が丁寧に描写されるため、主人公であるサムに感情移入して見る可能性は相対的に低くなる。

ここで重要なのが、視聴者がサムに感情移入をしながら見るのか、他の 3 人に感情移入をしながら見るのかで、このドラマの見方が大きく異なってくるという点である。もちろん、特定のキャラクターに感情移入をしたり強い愛着を持ったりせずに見る視聴者もいれば、多数の人物に部分的に感情移入をする場合もある。したがって、誰に感情移入をするか、どのくらい感情移入をするかは視聴

者それぞれである。しかしながら、群像劇である『ユニークライフ』では、サム以外の役人物に強く感情移入をした場合に、自閉症のサムが「他者化」され、視聴者との心の距離が生まれるという事態が起こりうる。例えば、妹のケイシーに強く感情移入をしながら見た場合、前項で例としてあげた、サムがケイシーの友達に出会い頭で“twat!”と叫んでしまうシーンでは、突発的に“twat!”と叫んでしまうサムの混乱よりも、ケイシーの驚きと戸惑いがより強く印象化されるだろう。ドラマ全体を通して見ればケイシーはサムに対して深い愛情を示していることが分かるが、「障害者の兄を持つ妹の苦労と苦悩」という側面に深く共感しながら観た場合には、Rowe の述べるように、この場面は「周囲の人々を信じられないほど不快にさせる」ものとして印象付けられる可能性が高くなる。また、サムを他者として内面化しながら観る場合には、彼に対する「理解できなさ」や「自分とは違う」という目線が強化され、彼の行動の突飛さ・奇妙さは、より強く差別的な笑い、上から目線の嘲笑に結びつくことにもなるだろう。

4. ブラッシュアップされる障害表象：『ユニーク・ライフ』のシーズン 11 から 4 にかけての展開

『ユニーク・ライフ』はシーズン 1 での批判や視聴者の声を受け、シーズン 2 以降では前節で指摘した点を含む、障害表象の改善が見られた。以下では、シーズン展開に伴う変化を 4 つ紹介する。①障害の特性を用いた笑いの克服、②主人公サムの成長の明確な描写、③他者化の克服、そして④妹ケイシーのセクシュアリティという新たなテーマへの挑戦である。

まず、障害の特性を用いた笑いの克服についてである。シーズン 2 からは、シーズン 1 で見られたような障害の特性に起因する笑いの描写が排除されており、代わりに登場人物同士の会話の掛け合いによって笑いを提供している。このようなアプローチにより、笑いが物語の自然な流れの中で生まれるものとなり、障害そのものを笑いの対象にしない物語が実現されている。その結果、視聴者は笑いつつも、登場人物たちの感情や関係性に深く共感できるようになっている。

次に、主人公サムの成長がシーズン 1 よりも明確に描かれている点である。特にシーズン 2 では、「頼れるようになること」が成長のテーマとして掲げられているが、これは「障害の医学モデル」に内在する自己責任論という価値観[24]への

[24] 「自己責任論」とは、2000 年代に新自由主義的な考え方がアメリカから日本に流れ込んできた際に取り上げられた概念である。金融業界において、企業側は商品にリスクがあることを

アンチテーゼとして描かれているものとも捉えられる。「障害の医学モデル」は、「障害は個人の資質によるものだから、それを取り除く努力は自分ですべきである」という自己責任論の発想へと直結しやすい。一方で、障害者が困難に直面した際に、それを当人の努力によって解決させようとするのではなく、非障害者との互助によって克服するという考え方は、社会モデルに依拠している。このドラマでは、「障害の社会モデル」を前提として社会のあり方を問うばかりでなく、障害者と非障害者とによる共生の価値をも提示しており、この価値観を学ぶことこそがサムにとっての成長なのである。また、短いドラマ尺で障害者の成長を描く場合に見られる「物語の展開のために障害が都合よく利用される」というリスクを、本作は長期的な物語構成によって回避している。

さらには、他者化の克服も見られる。視聴者が一つの作品に触れる時間が長いほど、その作品そのものや作品内の登場人物・世界観に親近感を覚えるようになるというのは一般的な傾向だろう。本作はシーズン 4 にかけてストーリー重ねるごとに視聴者と登場人物との心理的距離を縮めており、視聴者はサムの障害やその家族の物語を「自分事」として感じられるようになる。例えばシーズン 1 では妹のケイシーにのみ心を寄せて見ていた視聴者が、シーズン 4 にかけてケ

説明することで責任を果たす代わりに、消費者は自分で判断した結果に対しては「自己責任」を取らなければいけないという論理である。現在では「自分の行動が引き起こしたことによって生まれる結果はすべて自分の責任である」という論理を基調として、金融業界に限らずあらゆる場面に浸透している考え方である。

イシーと同等にサムに対する心理的距離を縮めるという可能性も大いにあり得る。長い時間をかけて彼らの物語を長期的な視点で描き出すことで、視聴者が物語に没入し愛着を抱くことを促し、本作の題材となっている障害者やその家族に対する理解を深めることが出来る。

最後に、妹ケイシーのセクシュアリティという新たなテーマへの挑戦である。本作は、サムの自閉症という物語の主題を維持しながら、シーズン 2 以降ではケイシーが戸惑いながらもバイセクシャルであることを自認していく過程を丁寧に描いている。これが可能となったのは、シーズン 1 から 2 にかけてサムの直面する葛藤と成長が丁寧に描かれ、サムを中心に据えた一家の群像劇という土台が築かれていたからである。そのため、社会的要素を無理に詰め込んだという印象を与えることなく、物語としての一貫性と説得力を保っている。以上のように、『ユニーク・ライフ』はシーズン 1 から 4 への展開を通じて、障害者を描いた作品としてだけでなく、多様な人間ドラマを包含する物語としての完成度を高めている。

第 3 章：ドラマにみる各国の「障害者と雇用」のあり方

1. 夜職と昼職[25]、福祉的就労と一般就労とで揺れ動く障害者のジレンマ

本章では、3 つのドラマの主人公の労働に関わる場面を取り上げ、各国の障害者雇用制度と照らし合わせて分析することで、それぞれの国における障害者雇用文化の背景を整理し、障害者雇用のあるべき姿を検討したい。

まずは『初恋、ざらり』において障害者当事者キャラクターである有紗の雇用状況と、それに対して有紗自身が抱いている想いが現れている場面を取り上げたい。

ドラマ一話冒頭で有紗はコンパニオン[26]として働いており、男性客から性的な行為を要求された際には、「必要だって言われたら、拒めない」、「私、これでしか役に立てない」とモノローグで心情を吐露する。その夜、貼り紙で見かけた運送会社への採用に応募するつもりだと言い、履歴書を母に見せる。すると、「あんた、こんな学校行ってたっけ？嘘じゃん」と言われる。有紗は養

---

[25] 「夜職」とは、風俗産業全般のいわゆる「夜の仕事」を指す通俗的な表現である。「昼職」は「夜職」との対比の表現であり、風俗産業以外の全ての職業のことを指す。有紗が従事していたコンパニオンの仕事をここでは「夜職」みなすが、理由は注 22 に示す。

[26] コンパニオンとは、接客係を務める職業（主に女性）を指し、料亭や旅館・ホテルの宴会場などに出張して酒席での接客を行う。中でも客に対して性的なサービスを提供するコンパニオンは「ピンクコンパニオン」と呼ばれる。一話冒頭で有紗が客に対して性的なサービスを提供している描写より、有紗はいわゆるピンクコンパニオンであることが推測できる。

護学校に通っていたが、それを隠すために別の学校名を書いていたのだ。母の指摘に対して、「本当のこと言うと落とされちゃうし、普通の仕事じゃないとお給料安いし」と有紗はモノローグで答える。また、一話中盤のシーンでは、有紗と同じく発達障害と知的障害のある友子と仕事について話している際に、「今度はクビになりたくないし」と発言をしている。以上の描写から見えてくる「障害者と雇用」の現状と課題は、大まかに二点挙げられる。一つは発達障害・知的障害者女性と性産業の問題で、もう一つは福祉的就労と一般就労のジレンマである。

前述した通りドラマ冒頭では、コンパニオンとして働いている時に有紗は男性客に性的な行為を要求され、「必要だって言われたら、拒めない」「私、これでしか役に立てない」というモノローグが挟みこまれる。男性客の要求に応えている時の有紗の表情は明るいものではなく、むしろ虚無感や無力感に満ちたような表情で、されるがままに応えているという印象を抱かせる。つまり有紗にとって、コンパニオンの仕事や客との性的な行為は自ら望んだものではなく、お金を稼ぐ方法として、そして自己肯定感を保つための手段として「しょうがなく」、「それ以外に選択肢がない」からやっているのである。

では、有紗がこのような状況に陥ってしまう要因は何か。それは、知的障害や発達障害のある女性たちが性産業以外の労働現場では周縁化・無力化されて

しまうということである。知的障害者の性を研究対象とする武子(2021)は、知的障害者女性の周縁化を就労と人間関係という二つの面から捉えている。一般就労の場では、字が読める・計算ができるといった最低限のスキルが当たり前のものとして求められるため、これが得意でない知的障害者は圧倒的に不利となる。また、知的障害を有する場合、周囲と会話を合わせていくことが難しい場合も多く、人間関係が広がりにくい面がある。これは発達障害者にもまた当てはまることである。

このように一般就労の場で周縁化・無力化されやすい障害者女性にとって、福祉的就労よりも高水準の賃金を得ることができ、識字や計算の能力は必要とされず、かつ、お客さんに必要とされたり優しくされたりすることで自己肯定感や充足感を得られる性産業は、好都合なのである。ここで留意しておきたいのは、数ある選択肢の中から自らの意志で性産業を選んで従事している場合、それは決して否定されるものではないということである。しかしながら、もし彼女らが経済的・精神的な充足感を得ながら働く選択肢が性産業しかないのであったり、有紗のように自分の意志に反してでも従事していたりするのならば、性産業以外の雇用の場で障害者を周縁化・無力化している社会のあり方を問い直すべきだと言える。

二点目に取り上げるのは、福祉的就労だと十分な給料がもらえず、しかし一般就労だと業務内容や人間関係のトラブルによって続かないという問題である。そもそも、日本において障害者による労働を支援する制度は大まかに分けて二種類ある。一つは、障害者総合支援法を根拠法とした福祉的就労。もう一つは障害者雇用促進法改正を根拠法とした一般就労である。前者では障害者は、障害福祉サービスの「利用者」として位置付けられており、就労継続支援事業所や地域活動支援センターが代表的な制度に当たる。それに対して後者では、障害者は企業等と雇用契約を結んで働く労働者として位置付けられる(江本、2017)。障害が軽度である場合には一般就労をする場合も多く、有紗が言う「普通の仕事」も後者のことを指している。有紗は、福祉的就労だと給料が低いため、障害を隠して「普通の仕事」をすることを望んでいる。

有紗の意思を正しく理解するためには、福祉的就労と一般就労の間に賃金の差がどのくらいあるか知っておく必要があるだろう。厚生労働省 HP の「障害者の就労支援対策の状況」に掲載されている「令和 3 年度工賃（賃金）の実績について」によると、月額の賃金平均は、就労継続支援 B 型事業所で 16,507 円、就労継続支援 A 型事業所では 81,654 円である。雇用契約を結ばずより手厚い福祉サービスを享受しながら働くことのできる就労継続支援 B 型事業所に比べると、雇用契約を結びある程度安定した就労が求められる就労継続支援 A

型事業所は、賃金が高いことが分かる。ただし、一般労働者の現金給与総額の平均 325,817 円と比較すると、就労継続支援 A 型の賃金がそれほど「高い」とは決して言えない。[27]

有紗はアパートで母親と二人暮らしをしており、経済的に自立しているかどうかは定かではない。しかしながら、母親が有紗の就職状況を逐一把握しているわけはないこと、母親は自身の恋人と行動を共にしていること、有紗と母親とは全く異なる生活リズムで暮らしていることなどから、有紗はある程度母親からは独立して生活していることが分かる。また、母親はシングルマザーであり、暮らしぶりからも経済的にさほど裕福ではない様子が伺えるため、有紗の生活費は自身の収入によるところが大きいと推測できる。そうであるならば、比較的障害の軽い有紗がより多くの収入を求めて一般就労で働こうとすることにも合点がいく。

しかし障害者が一般就労で働く場合、業務内容や人間関係のトラブルによって離職に至ってしまう場合が多くある。有紗の「今度はクビになりたくないし」という発言や、障害があることを職場で必死に隠そうとする様子からは、一般求人で就職した職場で、障害もしくは障害に付随する特性を理由に解雇さ

---

[27] 厚生労働省. “毎月勤労統計調査（全国調査・地方調査）.” 厚生労働省, https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/30-1.html, (参照：2025/1/3).

れてしまったという過去の経験が推察できる。厚生労働省職業安定局の平成 29 年の資料によると、就職後 1 年経過した時点での職場定着率は、就労継続支援 A 型の求人によって就職した障害者が 70.4%であるのに対して、一般求人によって就職した上で障害を開示している障害者が 49.9%、一般求人によって就職し尚且つ障害を非開示にしている障害者が 30.8%でと低くとどまっている。これは、一般求人で就職した場合には、障害者は非障害者からの理解や合理的配慮を得られにくい傾向にあることが要因として考えられる。実際、金、孔(2021)は、日本の障害者雇用者数は年々増加の傾向を示している一方で、法定雇用率達成のための「数合わせ」の問題や、それゆえ障害者それぞれに配慮した仕事内容や労働条件などが十分に与えられていない現状を指摘している。

なお、一般就労でも障害者枠で就職することで、非障害者とさほど差のない雇用条件の下で、合理的配慮を得て働くことができる場合もある。同調査における、障害者求人によって就職した障害者の職場定着率は 67.2%である。有紗には障害者枠で就職するという選択肢がないように思えるが、これは第一には情報が行き届いていなかった可能性が考えられる。もしくは、一般就労の障害者枠であっても、非障害者と比べると給与水準が低かったり、一般採用枠と比べて職種や求人数が限られたりするという課題があることを鑑みると、始めから選択肢を排除してしまっている可能性も考えられる。

障害者雇用におけるこのようなジレンマを克服する方法として、近年、一般就労と福祉的就労の谷間から生まれた新たな雇用形態である「社会的雇用」が注目されている。磯野(2015)は「社会的雇用」の特徴を以下の七点にまとめている。

①一般就労と福祉的就労の谷間を埋める新たな雇用形態である

②一般就労と福祉的就労の中間として柔軟に双方向に機能する

③障害者にも労働関係法規が適用される

④労働政策と社会福祉政策を一体に展開する

⑤サービス利用者ではなく労働者として働く

⑥社会的弱者全体の保護雇用へと発展していく

⑦インクルーシブな社会の実現に向けた共同体に及ぼす波及効果がある

つまり「社会的雇用」とは、通常の競争的雇用には適さない障害者が、保護された環境下で合理的配慮を受けながら、社会経済の主体たる労働者として適格な賃金を稼ぐことができるという働き方であり、これを実現する典型的な事業所の形態として、社会的事業所が存在する。EU 諸国では近年、障害者の社会と労働市場への積極的参加を目標とした政策の一つとして社会的事業所の一種である社会的企業への支援策が講じられているほか、韓国や中国でも同様の取り組みが見られる。また日本では、滋賀県や札幌市、大阪府箕面市が 「社会

的雇用」を自治体独自に制度化している一方で、いずれの自治体も社会的雇用システムを支えるのに必要な財政が逼迫しているのが現状である。日本では未だ、社会的雇用やそれを推し進める社会的企業に関わる法制度は未だ存在しておらず、政府の直接的・積極的な支援政策の必要性が議論されている。

障害者が軽度な有紗の場合で言えば、彼女は職種や労働環境を選べば一般就労であっても十分に働くことができるだろう。その際に重要なのがいかにして合理的配慮を得るか、ということであるが、有紗がはなからそれを期待していないという事実は、一般的な労働市場においては障害に対する合理的配慮を期待できる状況ではないという現代日本の様相を映し出している。前述した 7 つの特徴のうちの⑥や⑦が示す通り、「社会的雇用」では単に労働・雇用政策に政府が介入し金銭面での支援を行うことのみならず、「社会的雇用」を契機として社会的弱者全体を包括するようなインクルーシブな地域社会を実現すること見据えている。「社会的雇用」の推進によってインクルーシブな社会を実現していくことができれば、一般企業であっても障害者に対する合理的配慮を受けられるような職場環境を作ることが可能であり、有紗のような軽度障害者が就労するにあたっての選択肢を広げることができると考える。

2. 高学歴発達障害者が直面する就労上の課題

次に『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』における描写を通じて韓国の障害者雇用について検討する。自閉症スペクトラム症のヨンウは、ソウル大学のロースクールを首席で卒業しており、弁護士試験でも 1,500 点以上をとるほど秀でた学力や記憶力を持っている。それにも関わらず、就職にあたって法律事務所を受けた際にはなかなか採用されず、その様子を見かねた父がソウル大に通っていた頃の後輩に頼み込み、最終的にはハンバダ法律事務所に就職したのである。

前提として、韓国の障害者雇用制度は一般雇用体系における障害者雇用制度と保護雇用体系に分けられる。前者にたたる制度としては割合雇用制度があり、法定雇用率の設定と雇用奨励金制度、雇用負担金制度などによって運用されているという点では日本の制度と類似したものと言える。これに加えて、差別禁止法制度が並行して運用され、「正当な便宜」提供が義務付けられている。保護雇用制度としては社会的企業制度があり、一般労働市場において働くことに制約のある集団(障害者や高齢者、低所得者などを含む「脆弱階層」)に対して公的資金による賃金補填によって最低賃金適用等を確保するものであ

り、脆弱階層に対する雇用の提供と社会サービスの提供を同時に達成することを目標としている[28]。

このように包括的な制度設計が行われてきたものの、障害者の雇用機会はまだ限定的なレベルにとどまっているのが現実である。雇用労働部の「障害者雇用計画及び実施状況報告資料」によると、2019 年の政府機関と民間企業における障害者雇用率はそれぞれ 2.86%と 2.79%であり、法定雇用率である 3.4%と 3.1%をいずれも下回っている。また、15 歳以上の障害者の経済活動参加率は 37.3%であり、全国民の経済活動参加率の 64.0%と比べると低い水準にとどまっている。また、社会的企業の取り組みにおいても、政府の社会的企業に対する支援期間の短さ、一般企業との賃金の格差や非正規雇用労働者の割合の高さなどが課題とされている[29]。

ヨンウは幼い頃から弁護士を目指していた父の影響を受け、法律分野においては天才的な記憶力や思考力を発揮するようになり、弁護士という専門職に就くことはある意味必然的であったと言える。しかしながら実際に法律事務所に就職する際には、学力以外にもコミュニケーション能力や柔軟な対応力が求められるため、他の障害のない弁護士と比べるとどうしても不利な状況にあっ

---

[28] 小林昌之編. 『アジアの障害者雇用法制』. アジア経済研究所, 2012.

[29] 磯野博. “障害者に対する「社会的雇用」の課題と展望：東アジア諸国における保護雇用の取り組みをとおして.” 『社会政策』, vol. 7, no. 1, July 2015, pp. 112–125.

た。このような描写からは、高学歴の発達障害者に対する就労支援の不足という課題を読み取ることができる。

梅永(2021)によれば、アメリカと日本においては、知的障害を伴わない高機能 ASD 者に特化した職業リハビリテーションや就労支援制度がないために、履歴書の書き方や面接でのやりとりなどができず、就職したとしても同僚上司とのコミュニケーションや対人関係のトラブルによって離職してしまうという結果が示されていることを指摘している。知的障害者を伴わない発達障害者には、ヨンウのように高学歴で知的にも秀でた者が多くいるが、彼らは仕事そのものの能力であるハードスキルは十分に有していても、職業生活遂行能力と呼ばれるソフトスキルに困難性を抱えている場合が多いためである。韓国における同様の報告を見つけることは出来なかったが、障害者の就職率や障害者雇用制度が日本と近しいことを踏まえると、韓国でも同様の問題を抱えていることが推測できる。梅永(2017)は、彼らの就業上の具体的な課題は適切なジョブマッチングがなされていないこと、職場の同僚上司の ASD に対する理解が進んでいないこと、そして就職後のフォローアップが十分でないことなどであるとし、ASD 者に特化した職業リハビリテーションサービスを充実させることが必要であると報告している。高学歴の発達障害者に対する就労支援に関しては、日本でも韓国でも未だ十分な議論が行われていない領域であると考えられるた

め、発達障害者の就労率の上昇を目指すにあたっては、制度の構築が急がれる。

3.『ユニーク・ライフ』にみられる統合雇用モデルの障害者雇用

最後に『ユニーク・ライフ』にみられるアメリカ特有の障害者雇用制度を取り上げる。主人公のサムは、家電量販店の技術サポートデスクで働いている。高校生から大学生にかけて学業と両立しながら働いていることからアルバイトだと思われ、業務内容としては事務作業、電化製品の修理、お客さんへの家電の説明などを行っている。

障害者と雇用という観点からこのドラマを読み解くにあたって注目したいのが、自閉症スペクトラム症のあるサムがアルバイトするにあたって、家電量販店がいくつかの面において理想的な職場・働き方として描かれているということだ。大まかには、以下の二つにまとめられる。

第一に、サムが自身の長所を活かしながら働けている点である。サムは対人関係においては、暗黙の了解や言葉の裏の意味が読み取れず、また相手の様子を気にせずに好きな話をし続けてしまう傾向にあるため、トラブルに陥ってしまうことが多い。一方で記憶力が良く、特に自身の興味のある分野である海の生き物生態に関しては、ドラマ内でも度々知識を披露している。そんなサムは

家電量販店の勤務初日には既に商品棚の配列を全て記憶してきており、サムのトレーナーでありやがて一番の親友となるザヒードは、驚きながら「良い店員になれるよ」と言う。サムの職場でのシーンはエピソードが進むにつれザヒードと話す場面が主になり実際に働いている様子の描写は少ないが、それでも、少なくともサムは得意な分野の職務を遂行できる環境にあることが分かる。

第二にサムは、一般就労の職場で、非障害者と対等な立場で働けているということである。前述した通り、サムの職場が舞台となるシーンでは友人のザヒード、そして店長のボブとの会話がメインで描かれることがほとんどであるため、雇用形態や職場環境について詳しく読み解くことは難しい。サムが友人としてザビードと度々すれ違いを起こすこと以外、職場において業務内容や人間関係でトラブルに陥ることはほとんどないが、それは職場で合理的配慮が実践されているからなのか、はたまたドラマ構成上の都合で描かないという選択肢を取ったからなのかは不明である。しかし、敢えてドラマ内で描かれている部分のみで判断するならば、サムにとってこの家電量販店とは一般就労の職場で障害を理由に制約を受けることなく、ザビードやボブといった障害のない人物たちと共に働ける環境であり、これは以下に述べる「統合雇用モデル」に当たると言えるだろう。

『詳説障害者雇用促進法―新たな平等社会の実現に向けて〔増補補正版〕』によると、諸外国における障害者雇用に関しては「適材適所モデル」と「統合雇用モデル」という二つの政策指向がある。「適材適所モデル」とは障害者の労働能力や意欲にあった就労の場を他階層的に提供するものであり、フランスやオーストラリア、そして日本がこれを採用している。一方で「統合雇用モデル」とは、重度の障害者であっても通常の労働市場における統合された職場で就労させることを重視するものであり、アメリカではこの政策を採用している。

「適材適所モデル」は障害者の能力や意向にあった就労の場であるため、階層間における移動(例えば就労継続支援 B 型事務所から A 型事務所、福祉的就労から一般就労への移動など)が少ない傾向にあり、潜在能力が高い障害者であっても、その能力や意欲を最大限発揮できない可能性がある。一方で「統合雇用モデル」は、障害の度合いに関わらず障害者の「できる」という面を重視しており、事業者の協力の下で一般企業という統合された場で非障害者と共に、原則として最低賃金以上の賃金を得ながら働くことができる。雇用の機会を得られない障害者の行き先が限定されてしまうというデメリットが指摘されているものの、ソーシャルインクルージョンと「ディーセントワーク」の理念[30]を

[30] 厚生労働省によると、「ディーセントワーク」とは「働きがいのある人間らしい仕事」のこ

踏まえると、障害者の雇用の質的向上を実現しうるという点においては「統合雇用モデル」がより理想に近いと考えられる。

アメリカで「統合雇用モデル」が採用されてきた背景には、「1990 年障害を有するアメリカ人法（Americans with Disabilities Act of 1990）」=ADA の制定があった。ADA は、障害に基づく差別を禁止することによって、障害者に対して機会の平等、社会への完全参加、自立、経済的自足を保証する法律である。同法では障害者に対する雇用機会の保障を目的の一つとして掲げており、雇用主に合理的配慮の提供を義務付けている[31]。同法では「障害」を画一的に定義するのではなく、広く柔軟な定義を採用しているため、適格性を有する障害者に対して柔軟な対応が求められる。また、日本のように国が主導して福祉的な障害者雇用政策を行うのではないため、具体的な障害者雇用政策については各州に委ねられている。ADA がこのような特徴を持つがゆえ、アメリカでは障害者であっても非障害者と同じように一般企業で働く環境が一般的とされており、もとより統合雇用モデルの障害者雇用が根付いているのである。これ

とで、(1)雇用の促進、(2)社会的保護の方策の展開及び強化、(3)社会対話の促進、(4)労働における基本的原則及び権利の尊重、促進及び実現の 4 つの戦略的目標を通して実現されると位置付けられている。

[31] 所浩代. “アメリカの障害者雇用政策--障害者差別禁止法(ADA)の成果と課題（特集 アメリカの社会保障).” 『海外社会保障研究』, vol. 171, no. 171, 2020, pp. 62–71.

を踏まえると、サムが働くのは、アメリカの障害者雇用のあり方を体現する職場の一例だと考えられる。

日本と比較すると理想的に見える米国ではあるが、長谷川(2018)はADAにもいくつかの問題点があると指摘する。例えば、合理的配慮を提供されてもなお職務の本質的機能を遂行できない者は適用対象から外れるため、重度の障害者はADAの保護を受けられないという問題や、合理的配慮の提供義務が障害者の雇用には「コストがかかる」という先入観や偏見を植え付け、結果として障害者の雇用に不利に作用するという問題が挙げられる。また、雇用現場における差別の解消には一定程度の効果をあげたと言われているものの、明らかな雇用促進効果はなかったこと、および、障害のない者との差は依然として大きいことが指摘されている。

こういったアメリカの現状を踏まえ、日本では適材適所モデルを維持しつつ、統合雇用モデルの施策を部分的に取り入れたハイブリッドモデルを実現すべきだと中川(2024)は主張しているが、実際に福祉的就労の制度的枠組みを維持しつつ一般的就労を促すことで、障害者の就労意欲、能力、経験を高め、自らが望む就労・生活環境を実現することができると考えられる。

おわりに

本論文では、2010 年代に日本、アメリカ、韓国でそれぞれ制作された『初恋、ざらり』、『ユニーク・ライフ』、『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』の 3 つのドラマを取り上げ、障害者表象について分析を行った。これらの作品はいずれも「障害の社会モデル」による認識を前提として作られており、障害者を「共生の対象」として描くという試みが見られた。その結果、障害者キャラクターが記号的に描かれることや障害者に対する偏った認識を冗長させるような描写は回避され、いずれのドラマにおいても現代社会を生きる障害者に特有の困難や苦悩を物語の中心に据えながら、個性と主体性のある生身の人間としての障害者キャラクターを描くことに成功していたと言える。その一方で、作品のディティールに着目すると、いずれの作品においても改善する余地のある障害表象が見られた。

『ユニーク・ライフ』ではシーズン 1 から 4 にかけて展開する過程で、批評や視聴者の声を受けて、偏りのある障害表象が改善されていった。これは、過去の表象への反省を踏まえながら進化していく映像文化の成長のプロセスの一端を担っているとも捉えられる。実際に、塙 (2024) は、障害者への認識は「差別、恐れの対象」から「同情、哀れみの対象」、そして「共生の対象」と時代と共に変化しており、これと並行する形で映像文化における障害表象も改善されてきたことを指摘している。したがって、2010~2020 年代に制作された 3 つのドラ

マの分析を通じて障害者表象の現在地を明らかにした本論文は、障害者が登場するドラマや映画が今後制作される際に新たな視点や課題を提供しうるという点で、意義深い取り組みであったと言えるだろう。

理想的な障害表象を考えるにあたって、本論文を通じて得られたいくつかの視点を紹介したい。前提として、障害表象は社会の障害者に対する認識と呼応するものであり、2025 年現在は、「共生の対象としての障害者」の認識が社会に根付き始めたことに伴って新たな障害表象の形が確立されようとしている黎明期であると筆者は考える。この認識に基づくならば、第一に、多様な障害者のあり方を多角的に描くようなドラマが各国で恒常的に制作されていくことが重要である。「障害」と一口に言っても、身体障害・精神障害・知的障害・発達障害など様々な種類がある。また、有紗、サム、ヨンウは同じ自閉症スペクトラム症であるにも関わらず異なる困難を抱えていたように、同じ名前の障害であっても度合いや特性は多様である。仮に、あるドラマにおける障害表象が理想的なものであっても、障害者を描いたドラマがそれのみに限られる場合、視聴者の障害者に対する認識は特定のものに固定化されてしまう恐れがある。障害者の多様性を一つのドラマで伝えきることは難しいため、視聴者が障害の多様なあり方を認識し、障害者に対する多角的な視点を得るためには、障害者が登場する多様なドラマを各国で絶えず作り続けていくことが不可欠だろう。またその際には、障害

者と社会との様々な接点を描くこと、障害者キャラクターに物語上の多様な役割を担わせること、多様なジャンルのドラマを作ることも重要である。障害者キャラクターを主人公に据えて彼らの葛藤と成長にフォーカスするドラマがあれば、障害者が健常者と同じように数多くの登場人物のうちの一人として出てくるドラマもあり、人間ドラマもサスペンスもラブロマンスもコメディもある。このような状態を生み出すことができれば、映像文化全体として、視聴者の障害者に対する理解と配慮を促すという役割を果たすことができるだろう。また、前述した通り今現在は「共生の対象としての障害者」という認識の下で障害者を描くドラマが登場して間もない時期であり、少なくとも障害者に対する多角的な理解がより一般的なものとして根付くまでは、障害者がこの社会で直面する生きづらさや困難を矮小化せずに描くことも重要である。多様な障害表象が当たり前のものとして根付いた先に、新たな障害表象が生まれる可能性もあるだろう。

最後に、本論文では取り上げることのできなかった論点を今後の課題としていくつか紹介したい。第一に、障害表象を含むドラマを制作する上で障害当事者がキャスティングされにくいという問題である。取り上げた三つのドラマの主人公にはいずれも、障害のない俳優が起用され、『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』においてはヨンウ以外の二人の自閉症スペクトラム症のキャラクターも、非当事者の俳優が演じた。障害者の役を非当事者の俳優が演じることによって、障害の

ある俳優の出演機会が奪われてしまうという点は大きな問題である。『ユニーク・ライフ』では、シーズン 1 で障害当事者の俳優が一人しか出演していないとの批判を受け、シーズン 2 以降では、自閉症スペクトラム症の自助グループに参加するキャラクターは全て、障害当事者の俳優が起用された。障害当事者の俳優を起用し続けることによって、制作陣にとっても障害当事者の俳優たちにとっても望ましい制作環境が整えられていくだろう。第二に、障害者以外のマイノリティの表象についてである。今回は発達障害のうちの自閉症スペクトラム症のあるキャラクターに焦点を当てて障害表象を分析したが、例えば LGBTQ＋や在日外国人など、ドラマにおける他のマイノリティの表象についても、今後の展望を期待したい。第三に、ダブル・マイノリティの表象についてである。ダブル・マイノリティとは二つのマイノリティグループに属する人のことで、例えばゲイの障害者や、トランスジェンダーの在日韓国人などがこれに当たる。今回取り上げた三作品以外にも、日本・アメリカ・韓国における障害者を描いたドラマについてリサーチをしたものの、ダブル・マイノリティのキャラクターを描いた作品は見つからなかった。少数派の人々の声を拾い上げ、彼らの生きづらさを描くことで、今まで疎外されてきたマイノリティの人々が少しでも生きやすい社会になるように促すことがドラマの役割の一つであるとするならば、未だに描かれていないマイノリティグループの人々や、複数のマイノリティグループに属する

人々を描いた作品が今後登場することに期待したい。

参考文献

＜日本語＞

有田伸弘. “障害を持つアメリカ人法における「合理的配慮」とアファーマティブ・アクション.” 『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』, vol. 14, no. 2, Mar. 2011, pp. 1–9.

磯野博. “障害者に対する「社会的雇用」の課題と展望：東アジア諸国における保護雇用の取り組みをとおして.” 『社会政策』, vol. 7, no. 1, July 2015, pp. 112–125.

伊藤修毅. “障害者雇用における特例子会社制度の現代的課題：全国実態調査から.” 『立命館産業社会論集』, vol. 47, no. 4, Mar. 2012, pp. 123–138.

稲葉美映子, 「子どもを手なずけ性加害をする『性的グルーミング』—親が知るべき卑劣な手ぐちを専門家が解説」、コクリコ, 11 Jan. 2024, https://cocreco.kodansha.co.jp/cocreco/general/health/seikyoiku/9rHtG.

梅永雄二. “発達障害者の就労上の困難性と具体的対策：ASD 者を中心に.” 『日本労働研究雑誌』, vol. 59, no. 8, Aug. 2017, pp. 57–68.

梅永雄二, et al. “高機能 ASD 者の就労上の課題とそれに伴う高機能 ASD 者に特化した就労支援の必要性.” 『発達障害研究』, vol. 43, no. 1, May 2021, pp. 48–58.

江本純子. “システムとしての「職場」における障害者雇用の効用 —障害者雇用を通じたディーセントワークの実現—.” 『社会政策』, vol. 8, no. 3, Mar. 2017, pp. 92–105.

江本純子. “障害者の就労を取り巻く最近の変化—障害者雇用促進法改正の意義と課題—.” 『職場の人権』, vol. 100, Sept. 2017, pp. 1–7.

落合俊郎, and 姜美羅. “韓国の社会的企業が日本の障害者雇用に与える示唆について.” 『職業リハビリテーション』, vol. 24, 2, 2011, pp. 36–41.

金早雪、孔栄鍾. “日本における障害者雇用政策の現状と課題—韓国の取組みと日本への示唆—.” 『大阪商業大学共同参画研究所紀要』, no. 2, Mar. 2021, pp. 97–124.

權 偕珍. “QOL の観点に基づいた韓国の障害者雇用促進制度.” 『社会政策』, vol. 8, no. 3, Mar. 2017, pp. 106–119.

グッドマン、ダイアン・J.『真のダイバーシティをめざして 特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育』. 田辺希久子訳,初版,上智大学出版, 2017.

厚生労働省. “毎月勤労統計調査（全国調査・地方調査）.” 厚生労働省, https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/30-1.html, (参照：2025/1/3).

厚生労働省職業安定局障害者雇用対策課. “令和 5 年度障害者雇用実態調査結果報告書.” 厚生労働省, June 2023, (参照：2025/1/3).

小春. “「普通になれない」女性の恋愛模様に共感の声「初恋、ざらり」が描き出す現代社会のリアル【漫画】.” HUFFPOST, 20 Nov. 2021, https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_6194659de4b025be1ad3bf49.

小春. “スティグマについて.” 国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部, 29 Nov. 2021, https://www.ncnp.go.jp/nimh/chiiki/about/stigma.html.

小林昌之, editor. 『アジアの障害者雇用法制』. アジア経済研究所, 2012.

崔栄繁. “韓国の障害者雇用制度.” 『アジア経済研究所』, 2011, pp. 9–29.

佐藤安「日本における戦後障害者運動の軌跡と課題について」, 『社会論集』, no. 21, 2008, pp. 1–17, https://kguopac.kanto-gakuin.ac.jp/webopac/bdyview.do?bodyid=NI30000769&elmid=Body&fname=001.pdf&loginflg=on&block_id=_296&once=true. J-STAGE.

佐藤優. “自己責任という言葉に踊らされる現代人の哀れ.” 東洋経済オンライン, 20 Mar. 2020, https://toyokeizai.net/articles/-/337633.

塩津博康. “障害者就労支援事業所の社会的企業化：新たな実践動向のモデル化の試み.” 『社会福祉学』, vol. 56, no. 4, Feb. 2016, pp. 14–25.

鈴木桃花. “『初恋、ざらり』キャラクターの心情に共感の声が続々　現代人との‘ざらり’とした共通点.” Real Sound 映画部, 8 2023, https://realsound.jp/movie/2023/08/post-1411458.html.

高間満. “韓国における社会的企業の現状と課題.” 『神戸学院総合リハビリテーション研究』, vol. 11, no. 2, Mar. 2016.

滝吉美知香, 田中真理. 「典型発達者における自閉スペクトラム症理解と自己肯定意識との関連：自閉スペクトラム症者とのグループワーク実践をとおした変容」, 『発達心理学研究』, vol. 32, no. 1, 2020, pp. 24–36. J-STAGE.

武子愛. “女性福祉における知的障害女性の主体性の潜在化：性被害防止と性の権利保障の間で.” 『女性学研究』, vol. 28, Mar. 2021, pp. 103–124.

武子愛, and 児島亜紀子. “反抑圧アプローチの視点から迫る軽度知的障害女性の性産業従事当事者の語りから従来の言説の捉え直しへ.” 『女性学年報』, no. 44, Dec. 2023, pp. 61–79.

所浩代. “アメリカの障害者雇用政策--障害者差別禁止法(ADA)の成果と課題（特集 アメリカの社会保障).” 『海外社会保障研究』, vol. 171, no. 171, 2020, pp. 62–71.

中川明夫 「文学・大衆文化と内在文化との関連性に関する研究」, 『尚桐大学研究紀要 人文・社会科学編』, no. 55, 2023, pp. 1–7. J-STAGE.

中川純. “障害者雇用における「統合雇用モデル」の研究：障害者の「できる」に対する理念・政策.” 『科学研究費助成事業　研究成果報告書』, June 2024.

西田玲子. “日本の障害者雇用政策における統合雇用モデル推進に関する一考察：アメリカの連邦政府機関におけるアファーマティブ・アクションを参考に.” 『日本労働法学会誌』, no. 133, May 2020, pp. 290–302.

長谷川珠子. 『障害者雇用と合理的配慮―日米の比較法研究』. 1st ed., 日本評論社, 2018.

長谷川珠子, et al. 『現場からみる 障害者の雇用と就労：法と実務をつなぐ』. 1st ed., 弘文堂, 2020.

塙幸枝, 「映画における障害表象-コミュニケーションの問題として描写される障害』*Japanese Journal Communication Studies*, vol. 43, 2, 2015, 109–124 頁. J-STAGE.

塙幸枝. 『スクリーンのなかの障害　わかりあうことが隠すもの』. 1st ed., フィルムアート社, 2024.

福井伸佳, et al. "障害を開示して就職した高学歴発達障がい者の就労課題に関する研究." 『日職災医誌』, vol. 70, no. 1, 2022, pp. 31–37.

前野明子. "発達障害者の就労の現状と今後の展望 -知的障害を伴わない発達障害者を中心に-." *研究紀要. 志學館大学=Research Bulletin of the Faculty of Humanities, Shigakukan University*, vol. 42, Mar. 2021, pp. 59–72.

松井彰彦編、 『障害を問い直す』, 東洋経済新報社, 2011.

好井裕明、『「感動ポルノ」と向き合う　障害者像にひそむ差別と排除』, 岩波書店, 2022.

"見た目で障害とわからない故の苦しさや感情を描きたかった 「初恋、ざらり」漫画家ざくざくろインタビュー." テレ東プラス, 7 Spring 2023, https://www.tv-tokyo.co.jp/plus/drama/entry/202307/13654.html.

"療育手帳（愛の手帳）とは？取得するメリット、等級、判定基準などを紹介." *LITALICO ジュニア*, 6 July 2022, https://junior.litalico.jp/column/article/006/.

＜英語＞

Fabian, Renee. "How These Autistic Actors Helped 'Atypical' Increase Its Authentic Representation." *The Mighty*, 9 Dec. 2019, https://themighty.com/topic/autism-spectrum-disorder/atypical-cast-autistic-peer-group-actors/.

McManus, Michelle. "Grooming: An Expert Explains What It Is and How to Identify It." *The Conversation*, 16 May 2022, https://theconversation.com/grooming-an-expert-explains-what-it-is-and-how-to-identify-it-181573.

Moeder, Michael. "A Comparative Analysis of Narrative Structure in the Prime-Time Television Situation Comedy". PhD diss., University of Missouri-Columbia, 1994.

Rowe, Mickey. "Netflix's 'Atypical' Was a Major Disappointment for Autism Representation." *Teen VOGUE*, 8 Aug. 2017, https://web.archive.org/web/20170930021525/https:/www.teenvogue.com/story/netflix-atypical-autism-representation.